

## 法學研究のための一指針

——一橋にあてた外遊中の三つの書翰——

大 平 善 梧

今度私が、一橋大學前期の法學通論の講義を擔當することを命ぜられ、その結果、一橋論叢に法學研究の手引に在る一文の執筆を求められた。法學通論の講義には、町田實秀・田中誠二・田中和夫・田上穰治・植松正・吉永榮助の諸教授がヴェテランとして控えており、敢えて不肖の私が、その任を引受けることは、不適當だと考えられた。しかし、一年半餘、外遊のため大學を留守にして、諸教授に迷惑をかけてきた關係もあり、責任上やむなく擔任することになった。直ちに一橋論叢の方の執筆を考慮せざるをえなくなったが、六法全書から離れた生活長くやってきたためもあり、思うように構想がまと

まっていけない。その種類の本としては、牧野英一・末弘巖太郎・穂積重遠・田中耕太郎・尾高朝雄の諸博士の著作がすでに學界の定評を得ており、あえて屋上に屋を重ねる愚を犯したくない。牧野英一博士の『法律學を志す人々へ』をこの程改めて採りだしてみたが、今の私でも、教えられる所が多く、名著だとの感を深くする。こんど發刊される「法律學全集」の中の、我妻榮教授の『法學概論』も、同じく期待してよろしいであろう。本學の町田實秀博士の『法學——制度と思想の歴史を中心として』の一本も、法學入門の必讀の書として推賞に値いする。そこで、私は、外遊中、とくにハーヴァードより一橋

のゼミナル學生に書き送った書翰を三つ掲げて、法學研究のための一指針となればと考えた次第である。法學は大人の學問であり、良く社會を知ることがまず第一條件だと考えられる。そのためには、身近かな社會環境を分析して、それを基礎にして全體の法的メカニズに通曉してゆくやり方も考えられるが、その反對に、最初に世界を知り、世界の中における日本の位置を考慮することによって、日本の法的メカニズを理解するやり方もあるわけである。後者の立場から言えば、私の三つの書翰は、外遊中の極めて斷片的な感想をつづりあわせたものではあるが、日本の法學者の一つの在り方を語るもので、また法學研究に對する一つの指針として役立つ點もあるように思われる。この三つの手紙は、技術的な法學法を説くよりも、一つの研究氣魄を示しておる。とりわけ、國際法や外交史の研究に志すものには、參考になる個所もあるだろう。また外交科試験の受験を希望するものにも、具體的な指導を與えるところもあろうかと考える。とにかく、一橋法學の建設に關心を持って讀んでいただければ、それだけの意義はあると思われる。

#### 法學研究のための一指針

終りに、ハーヴァード大學の法學校の視學ロスコー・パウンドに面談した折、私が今まで博士の著書によって學んだ學恩を感謝したところ、老博士は、「學問には師弟はない。同じ道を行く同僚關係があるだけだ」と、謙遜に微笑をもつて答えて下さった。このロスコー・パウンド先生の言葉を、一橋大學において法學を學ぶ若い學生の方々に、そのまゝに捧げたいと思う。

#### 一 ゼミナアにあてた手紙

二 アメリカ外交史の研究を希望する若い學生への手紙

#### 三 新卒業生に送る手紙

#### 一 ゼミナアにあてた手紙

敬愛するゼミナア諸兄

早いもので、すでに横濱出帆以來、七ヶ月をすぎ、歐州三ヶ月半の旅も終え、そして再び米國に戻ってからも一ヶ月たつてしまいました。ポストン市外の大學町ケムブリッジに到着き、いわゆる素人下宿の一部屋を借り、

久しぶりで學生氣分に歸って、ハヴァード生活を始めた。下宿と言っても、部屋だけ貸すので、朝の食事はもちろん、お茶一つ出してくれません。この點は、ヨーロッパとりわけドイツ、オランダ、フランスなどの親切で人情味のある下宿とは違います。極めて機械的で、ビズィネスライクであります。歐洲の學生生活の長かった都立大學の喜多村浩さんが、この程ロックフェラーのフェローシップにて、ケムブリッジのMITに見えました。この下宿氣分の差をしみじみと語っておられました。しかし、食事は外ですが、それがみんなの生活様式ですから、カフェテリアやドラッグストアなど發達し、すべて清潔で合理的に出來てますから、日本の外食券食堂の様な、何か下等なみじめさなど微塵もありません。食べておる人も大變朗らかで、慣れれば億劫でもなく、又相當經濟的にもあげられる様であります。生活の標準化、私の言う罐詰・冷凍の食事の生活、アメリカ生活の根底にあるものが、それなのです。

ケムブリッジの日本人學生は、一般に非常に勉強家です。日本の名門の私費、その他の留學生も居りますが、

これらもやはり感心に勉強してきます。これでなければや  
って行けないのだと思います。ハヴァード大學もMIT  
(Massachusetts Institute of Technology)も、格式が  
高く、厳正で、學生をぎりぎり緊めあげてゆくところ  
です。ケース・メソッドの良し悪しはとにかくとして、  
アサインメントが澤山で、割りあてられたケースを見て  
行かねば、全然講義に出ても判りません。有能な日本の  
學生で、法科一時間の授業に、四時間の下準備を要しま  
しょう。良くケースを調べてゆけば、内容も理解でき、  
討論にも參加できます。教授も名前を呼んで當て、ゆき  
ますから、準備なしで出席するわけにもゆかないでし  
ょう。私は、ケース・メソッドの研究と英語の勉強とを  
かねて、ゼミナアと講義に出ますがアメリカの判例を  
良く読んでゆかねば、一般國際法理論など判ったって全  
然歯がたたず、私自身、ボランタリでありながら、勉  
強を強制されております。二時間の授業に二時間やれば  
ついてゆけそうです。ゼミナアの方は、バックスター  
Baxter, R. R. の International Law Problems で、バッ  
クスター氏から特に出席を希望され、顔を出すことにし

ました。「休戦から講和まで」の問題を拾ってゆくのですから、私として發言の機會もあり、また日本の方が遙かに深く掘りさげておる個所もあり、現に二回目には、私の意見をアンコンデシヨナル・サレンダーに就いて、その場で十五分程説明しました。草稿なしの即席の發言はこれが初めてでしたが、すぐ續々と質問があり、これに應答して、その日の演習を活潑にし得たようです。バックスターはアンコンデシヨナル・サレンダーは軍隊の降伏だというのですが、私は場合によって違ふと言うので、この邊は日本の研究の方が上です。そして内容さえ頭によく整理されておれば、英語はその次ぎ、後は度胸であります。後は度胸など問題でなくなつて、平氣で話しができるようになればしめたものであります。しかしそこまではなかなかであります。語學は若いうちですから、ゼミナア諸兄の計畫的な語學の勉強を切望します。本當にこれは實行していただきたいと思ひます。

歐洲から米國になると、違つた世界で、決して新世界は舊世界の延長ではありません。歐洲の方が、日本人にはびつたりくるものが多く、觀るものは心ゆくばかり樂

法學研究のための一指針

しかったのですから、米國に戻ると初めのうちはがっかりします。ヨーロッパ歸りの米國通過者は、多くアメリカを馬鹿にしたたり、不愉快になつたりして、日本に歸つてゆくようです。ヨーロッパから戻つてきて、アメリカで一仕事するはずの旅行者が、簡単に研究をやめて、さつさつと日本に引きあげる例が尠くないのは、一應尤なことだと思ひます。初めてアメリカに渡つた人は、見るもの聴くもの珍らしく夢中になつて、アメリカで勉強を初めるのが普通のようにです。また米國の大學に入れられれば、どうしても勉強せざるをえないようにさせられるのでしよう。しかし、本當のアメリカを知るには、やはり歐洲と比較してみても判ること、この點シークフリートの米國觀に深いものがあると思われまゝ。彼の新著 *America at Mid-century* (英譯版) を見ると、アメリカの批判が強すぎて、アメリカ人は不快を感じておる様ですが、私は賛成するところが多いのです。歐洲の旅の疲れを癒やし、歐洲の旅の整理をしながら、ゆっくり米國で目的の研究をまとめようとしてますが、歐洲からの旅行者の氣分は判ります。しかし、私は寧ろこの氣分を逆

用し、アメリカと歐洲とを比較して、アメリカ社會の中にあるものを改めて見直すことができるようで、アメリカでの生活の出だしは遅くとも、別な効果をねらつてみようと考えております。

私の出發以後、ゼミナは滞りなく進捗しておる様子にて、これは本當に私として感謝しております。春は細谷千博君を中心に、秋は經塚・佐藤兩君を中心に、怠りなく學のため御精進下さることを嬉しく思います。しかし、細谷君が九月にロックフェラー財團の招聘で渡米されたあとは、さすがにさびしそうですね。私はリスボン經由で十月四日にニューヨークに着き、その晩に早速に連絡がとれて、細谷千博君夫妻と再會し、その後のゼミナアの経過を聞くことが出来ました。細谷君も元氣でしたが、ニューヨークは物價も高く、部屋代は特に高いのですが、感じの良いアパートを見つけ移られた様で、經濟的にはやらなければならぬでしょうが、日本の生活よりは幸福そうでした。一緒に國連ビルを見學したり、古本街をあさったり、またコロンビア大學構内を散策しました。一緒にすきやきをつつたことは、ゼミナア

諸兄には耳に入れて置きたいことです。大體歐洲ではすきやきの店は尠く、またボストンにもありません。アメリカの東部ではニューヨーク、西部では、シャトル、シスコ、ロスアンゼルスではうまいすきやきが食べられます。さし、みはどこでもありますが、お新香とお茶づけとは、そうです疊の上で、茶舞臺に載せて、サーヴィスの良い日本の女中さんの給仕で、やれるのは、大和の國だけの特權のようです。細谷君と支那料理もたべました。支那料理は世界中いたるところにあります。しかしニューヨークの支那町チャイナタウンの中華料理はさすがにうまいです。細谷君の仕事は、外交史ですから、その點米國の學者との交流関係もできやすく、愉快な留學生生活を送れそうです。私としても満足であります。細谷君の送別會の寄書有難う。皆さんの期待が大きいのですから、細谷君もぐずぐずはしておれないでしょう。否私も、皆さんの御迷惑になりつゝ外遊しておるわけで、さらに今後の自戒奮起を誓いたいと思います。

經塚君佐藤君その他の人たちから、お心にかけて、お便りを續けていただいたことを厚禮申し上げます。とりわ

け、ヘーグに送って下すった梶原君の便りは嬉しかったのです。また、ハーヴァード大学のハドソン教授氣附けでいただいた田中昭君の便りも、就職の喜ばしい通知にて、私の心も暖かになりました。私のためハーヴァード大學は一つ研究室をくれましたから、ハドソン教授氣付けは不用になり、その代りに、Room 32, Law School, Harvard University, Cambridge 38, Massachusetts, U. S. A. のアドレスで良いことを、ついでに申し上げて置きます。十月二十日附の寄せ書きは、下宿に受取りましたが、無味乾燥に近い宿の生活の一日を楽しませていただきました。四月ゼミナアに入った新しい方々は、中途半端な氣持で居られる様にも感じられますが、學に師弟なく、ただ道を愛するもののみ學者なんですから、充分御精進下さって、一橋の學風の中で、立派な成果をあげられることを期待して居ります。ブライアライに、オックスフォードの自宅でお会いしましたが、彼の本はよいですから今度出た一又正雄さんの譯本でもよく、まずこれを通讀して下さい。なるべく原書を讀破されることです。これは第一のアサインメントです。第二に一橋大

法學研究のための一指針

學の圖書館にも入っていますが、外務省條約局で編集した國際先例集を頭から終りまで讀みとおして下さい。熱心家は條約局四課に行つて購入して頑張つて讀破して欲しいです。もちろんこれがケース・メソッドというやつではありません。第三に大きな問題で、立説、横田説、田岡説の異う點を表に書いて、分析してみして下さい。そしてできれば、この表の最後にオッペンハイム(或いはラウテルバハト)がどう書いておるかを明らかにすることです。これを新しいゼミナアの諸兄にお勧めいたしたいと存じます。

明年外交科受験志望の方々もあられることでしょう。このためには、健康と意志と努力、そして友人とを要します。毎日こつこつ絶えざる努力、そして常に問題意識を持つことが肝要であります。終戦後の筆記試験の國際法、外交史、國際私法、憲法の問題集を購入し、自分でその問題を考へてみ、問題毎に参考書からサブノートを作つて整理して御覽なさい。答案を書くことが大切です。簡潔に、重點的に、體系的に、そうです「ここで點をとつてやるぞ」という山のある答案を書ける様になら

ねば駄目です。記憶は正確に、概念は明瞭に、論旨は整然と、そしてまとめ方が立派であることです。とにかく競争ですから他の人より、少しでも多く、少しでも正しく勉強すればよろしいというわけであり、答えは short, direct & strong を要求します。short とはまわりくどいのはいかんということ、分量はむしろ少し長い方は良いでしょう。早く答案をかきあげるスピードも必要ですが何と言っても内容です。勉強したあと、本をよんだあと、自分の頭の中で remind すること、又友人と debate をすることをお勧めいたします。友人というのは、お互いに勵し合う、助け合う、あくまでも強い意志の益友を望みます。外交科を第一志望にし、國家公務員試験を第二志望にして受けてみるのもよろしいです。後者には、準備なしで通る様でなくては、前者には駄目です。

前の上海に長く滞在した折の経験から押してだんだんゼミナアの空気が沈んでくるのではないかと惧れます。大切なことは、經塚、佐藤の兩君を稽古代として、その上に出ることを考えて下さい。受身ではたえず遅れをと

ります。イギリス人は考えながら歩き、フランス人は考えてから歩くと評されます。私は考えては走り、又考えては走ることを要望します。剣道のつまさきに立ちながら腰のすわった姿勢です。前進體制にゼミナアは今あるでしょうね。ちょっとゆるんでもその遅れは非常なものです。天に飛んでゆく弾丸の様に思い切って飛んで下さい。拋物線は始めのスピードの如何によって、その終點を異にします。英雄的な努力は、人間には一度は必ずできるものです。その個々の努力は大きな宇宙の調和の中にとけこみます。併し、諸兄の現實の努力の跡は争いもなく、諸兄の蔭になつて着いてきます。

就職のきまつた方、またそれに奔走しておられる方、社會を眞面目に見つめて下さい。本年は何とか決る様子ですが、この點は大層皆さんに御迷惑をかけて、お役にたてないことを、慚愧に思っております。くれぐれもお許し下さいませ。經塚、佐藤の兩兄、それから甲島事務長も心から相談相手になって下さることと存じます。特に法學部長の久保岩太郎博士も力になって下さると思ひます。こまつたら、前學長中山さんや、現學長井藤さん

に話しにゆかれてもよいと存じます。今の日本の社會でも、たとえ曲りなりにでも、意志あれば何とかなるものです。氣を落さず門を叩くことです。推薦状のことなどは良く甲島さんに御相談下さいませ。若いけれどもゼミナアの先輩（善以會）にも顔を出してみるのも、時に有益だと存じます。

本年は八十週年にて、國立もいよいよ催し物も多く、楽しい秋の行事が展開されておることと想像しております。例えば秋の空がなつかしくなります。まだ日本は秋で、すっかり晴れ渡った空のもとに、運動會やらその他の會が行われておる様を空想してみます。すべてが心ゆくばかり楽しく完了することを祈り上げます。

留守宅から便りにて、ゼミナアの先輩の内田三十郎君が、十月二十四日に逝去されたことを知って、哀悼に耐えませんが、彼はこの戦争で戦傷を受け、病身で今日にいたったのですが、遂に神は彼のこの世の苦しみを執りさしたもうた様です。この戦争で、ゼミナアの中から、愛する白井静敏と中井隆とそして村田の三君を喪いました。今また内田君です。この七月にリヨン大學を訪れた

法學研究のための一指針

折、その法學部の横の小さい廣場に、第二次戦争の戦歿學生の碑が建つてのを見ました。美しい大理石の悲しみの女人像でした。國立の八十週年の記念にせめて心の中だけにでも、この學生と學生で嘗てあったものための戦歿記念碑を建てなければならぬと存じます。すべて過去を美しく現在に生かすのが、文化と言うものでしょう。魂のゆたかさ、先人の心ばえを思いみるゆたかさが、欲しいものです。

ではさようなら。ここで擱筆いたします。氣分とO.F. *Quality* の歐洲文化と、行動と *Quantity* の米國の文化の對照を問題にしましたが、日本はそれに古いアジア文化の問題にとっくまなければなりませんし、さらに近くにイデオロギーと計畫のソ連中共が居り、これに對決するわが國の課題は全く血みどろの話です。その烈しい國際對立の場で、自己形成に精進される大兄等の心の平安と身體の健康とを、遙かに希願いたします。日本人は頑張りより手はないのです。しかし考えて走りましょう。努力と工夫、それが我々の残された武器なんです。切に御機嫌よう。また會う日まで。ゼミナアの諸兄よ。



(一九五五年一月六日)

## 二 アメリカ外交史の研究を希望する若い 学生への手紙

先日はお便り有難う。今年は案外日本の冬は暖かであったようです。ところが歐洲の冬は、例年にならぬ厳しい寒波で、暖いはずのポルトガルのリスボンでも、外套を着て、皆寒い寒いと言っておるそうです。その影響か、ニュージーランドも、三月になつてからも、数度の降雪があり、一昨日の降雪は物すごく、一時は當地のバスなどの交通機関も停まり、今でも一尺以上の積雪です。しかし、すでに光は春で、この雪と交替に急に春が訪れてくると思われれます。當地の春は短く、五月にはもう暑くなると言うことです。

お手紙によれば、ご健康の調子もよろしく、御勉強に精を出しておられる趣、まことによるこばしく存じます。規則的な生活をして、日常生活の活動に耐えるように、逐次に鍛錬されてゆくことを、お薦めいたします。健康な生活を送るためには、新しい三つのR、すなわち、

リズム (Rhythm)、リラクゼーション (Relaxation) 及びレスピレーション (Respiration) が必要だと私は数年前から申しております。生活に調子をつけ、緊張と弛緩の律動を計るのです。アメリカに來たら機械文明に對する壓迫感を緩和するために盛んにリラクゼーションの言葉が使われておることを知りました。レスピレーションは、呼吸に注意することから、生氣の回復を意味します。ちょっと禪的になりますが、英米でも印度のヨガ (瑜伽 Yoga) に注目してきたことは、面白い現象だと思ひます。とにかく闘病には、休息と空氣と榮養が必要であります。そして前途に常に希望を持たれることが大切だと思ひます。思ひ煩うなかれ (Don't worry)。そしてそういう境地になるための工夫がやはり必要のようです。

大學院でも、大學の時のテーマを續けられて、アメリカ外交史の研究をまとめようと思つたとの御希望は、極めて自然な研究の歴史的發展で、私も當地から賛成いたします。「アメリカの孤立主義外交の變貌」というテーマは、アメリカ外交史の入門として、最も適當した題目の

一つだったと思われれます。細谷千博君は、よく貴方の相談にのってくれていたわけですが、同君も渡米して、コロンビア大學へ来てしまった後では、色々研究方法について困難を感じられておることと存じます。

ハーヴァード大學に来て、すでに半カ年、廣く國際關係の研究の一般的動向にも注意してきましたが、アメリカ外交史界の最近の動きには、次の如き大きな傾向が見えておるようです。

(一) 第一次大戦後の外交史に主力を集中しておること。

アメリカは實用を尊ぶ國で、今日の外交に役立つ研究がやはり優先しておるわけで、また最近のアメリカの外交史が、問題としてスケールも大きくなり、興味も自然あるわけでありませう。新しいフロンティアの開拓に、多くの學者が今や角逐しておるといふ状態でありませう。アメリカ外交史學の發達はやはり眼まぐるしいものを感じます。

(二) ドキュメンテーション Documentation に努力していること。

法學研究のための一指針

お手紙に、川原次吉郎教授が、洋行談として、ファクトを發想の幹とする歐米の思想的態度を何より先ず見習わなければならぬと言われたと書いてありましたが、全く同感です。そのファクトを容易に發見できるように、資料の整理に全力を注いでおるのです。編集も立派な學問的な業績になり、翻譯も立派な勞作として評價されておる現状であります。アメリカ全體に組織的に進行しておるドキュメンテーションの仕事はすばらしいものです。そして索引とカードを引けば、たちどころに必要な資料と文獻が判ります。すべての圖書館には連絡があり、目録の交換があり、自由に各地の資料をとりよせて閱覽できるわけです。觀念論ばかりで、ドキュメンテーションを怠っておる日本の學界の状態は反省を要するところですよ。

(三) 地域的研究 エリアスタディが盛んになってきたこと。

アメリカの學問は、その國際的な地位の變化に伴って、いよいよ地域的研究に拍車をかけてきたようです。外交史の研究の方でも、エリアスタディは盛んで、とり

わけ、ソ連研究とアジア研究が目まましいものがあるように思われます。

日本で、アメリカ外交史を研究することは、研究の歴史も新しく、資料も殆んど整っておらず、到底アメリカ人にはその足もとにも及ばぬことです。そこで日本人として、アメリカ外交史を物にして、一應の學問的水準に達するには、地域を極東にとり、日本及び中國方面の資料を駆使するか、又は材料はアメリカ人のドキュメンテーションを利用しつつも、そこに理論的な独自の解釋を與えるか、この二つの一つに在るようであります。

お手紙によれば、國際政治或は權力政治における輿論の役割について考えており、今後考えてゆきたいのとこのとであります。アメリカでは輿論の研究や社會のピフエビアの研究など、ここの社會獨特なものがあります。もちろん、この邊の認識がないとアメリカ外交の基調は本當に判らないと思われまゝ。しかし、アメリカの輿論やその輿論の形成過程やその外交に及ぼす影響など、日本において到底研究のできる仕事ではないようです。はやりだけでは學問にはなりかねます。思いつきだけでは物

になりかねます。日本では、何でもやれるようにはできてないという學問的條件を考えなければならないことはまことに残念なことですが、それは肯定しなければならぬ現實であります。

そこで、この輿論の問題を、稍々違った角度から見ても、公開外交は、適當した外交手段なりやの問題に切りかえてみることをお薦めいたします。それは、ウイルソンの主張以來アメリカ方式と稱せられる民主主義的外交方式の問題で、歴史的にも、政策的にも、また個々の事件にも即應して考えられるテーマだと思えます。

これについて、イギリスの外交史家のハロルド・ニコルソンが有力な文獻を提供しており、又ジャーナリストのドルストンも、立派な著書を公にしております。その書名は次の如くです。

Harold Nicolson, *The Evolution of Diplomatic Method*, 1954, pp. 93, London, Constable & Co.

Sisley Huddleston, *Popular Diplomacy and War*, 1954, pp. 272, Rindge, Richard R. Smith.

後者については、伊藤述史博士が、日本外政學會の昭

和三〇年二月二日號のニュースレターで、短文ながら立派な書評をされています。このニュースレターについては、經塚君にお尋ねなさい。そしてこの問題をいわば三角點として、アメリカ外交史を見てゆかれたら面白いと存じます。次の本もいくらか役立つかも知れません。

Max Beloff, Foreign Policy and the Democratic Process, 1955, pp. 127, Baltimore, John Hopkins Press.

最近ではアメリカ外交に關する概觀書の二、三をついでに紹介しておきます。

Pratt, Julius W, A History of United States Foreign Policy, 1955.

Kenan, Realities of American Foreign Policy, 1954.

Leonard, Elements of American Foreign Policy, 1953.

Dahl, Congress and Foreign Policy, 1950.

Snyder & Farniss, The American Foreign Policy,

1954.

Feis, The Diplomacy of the Dollar, First Era, 1919

— 1932, 1950.

またフレッチャースクールのバートレット教授も、昨年アメリカ外交史の資料をまとめた手頃な本を出しましたが、こんな本も手もとにあった方がよろしいでしょう。とにかく、アメリカの外交史の一般書は、最近出版のものだけでもお國がら澤山でていますので、尨大なものになりそうです。寧ろ本を限定して、その限度で考え方をまとめられる必要があると思います。

モルゲンソンのパワープリティックスの考え方は、秀れた研究方法だと思えますが、それだけでも外交史は判らんようで、アメリカ人の間には餘り一方的だとモルゲンソンは評判の悪い所があり、反って常識的なケナンの方が人氣があるようです。ケナンは、對ソ外交史をライフ・ワークとして、只今執筆中のようすであります。

外交史學は、日本ではなかなか育ちがたい學問のようですが、興味があるばかりではなく、國際的視野の不足しておるわが國としてはもっとどうしても盛んにしなけ

ればならない學問だと思ひます。昨日の経験が、直ちに明日の指針となる歐米のやり方は、この意味で本當に羨しい限りです。日本が今日學ばねばならぬことは、良い意味の経験主義で、是非大兄の研究も立派な實を結ぶことを祈っております。

(一九五六年三月一八日)

### 三 新卒業生に送る手紙

今日は、新しくこの春社會に向つて、鹿島立ちされる卒業生諸君の送別の宴が催されますが、ここに謹んでアメリカのハーヴァードの空より、お喜びの言葉を申し上げます。螢雪の功と一口に言いますが、日本の社會において、大學ことに一橋大學を卒業することができたということは、決して生まやさしい事ではなかったと存じます。今日までの諸君のなみなみならぬ苦勞、また御父兄の今日あらしめた御恩義は改めて感謝さるべきで、御両親のお喜びはさぞかしと思ひます。大學は、日本の社會では特殊な意味があり、今後諸君におかれては、長く公私とも一橋の名と結びついて、その前途の道路が展開し

てゆくだろうと考えます。新しいものは、すべて尊く、只今その新鮮な氣分で、勇敢に社會に躍進していただいてきたいと思ひます。

歐米を經巡ぐってきた私は、只今歐洲の印象や、アメリカの特色などを靜かに纏めあげ、考えあわせておりますが、その時にいつも頭から抜けないことは、日本人としての主體的な立場です。もちろんどう轉んでも、私たちが日本人であることに相違はないわけです。考えは、きまつて日本を基軸として展開されてきます。日本を知らない日本人の留學者位興味の無いものはないかも知れません。私が、どこへ行つても、一橋の學問を基盤にして物を見てゆくより外いたし方なかつたのは、けだし當然のことでしょう。そして若干でも、日本を知り、アジアを語りうる點が、今の私の強味のように感じます。それで、新しい日本の行くて、また新しい日本人の使命も、この視野から考えられてくるわけで、ここに私の考えの一端を申し上げて、鹿島立ちする諸君への餞けの言葉としたいと存じます。

今後の日本人の考え方、あるいは在り方として、私の

特に申し上げて置きたいのは次ぎの四つの點に歸着する  
 ようです。第一は、アジア人的自覺。第二は國際的識  
 見。第三は、組織の論理。第四は、技術に對する確信で  
 あります。

### 第一 アジア人的自覺

日本の將來はアジアに在る。敗戦によつて、その軍事  
 的政治的な日本の指導力は失われたけれども、尙日本の  
 アジアにおける地理的位置は不動であり、長く培つてき  
 た文化力は、まだアジア隨一のものであります。今日日  
 本が再び國際場裡においてその發言權を争うことは、不  
 可能でありましょう。その夢はすでに消え去つてゐる。  
 しかし國際連合におけるアジアの加盟國の數を數えてみ  
 よ。これに同教團及びアフリカを加えたときに、アジア  
 的勢力が、現在國際社會において無視できない存在であ  
 ることを感知できるのであります。

アジアの文化の根源は古く、その抱く思想も深遠であ  
 ります。そして現在のアジアの持つ問題、その悩みもま  
 た極めて深刻なものがあります。ナシヨナリズムの問  
 題、反帝國主義運動の問題、經濟開發の問題、技術援助

の問題、世界的な意味において解決を要する難問が山積  
 してゐる。そして最も大きな問題は、アジア的な世界觀  
 の世界史的意義の究明でありましょう。

以上の問題は、歐米人のみの良くするところではな  
 い。また印度人や中國人だけでも、解決しうるものでは  
 ないでしょう。東洋と西洋との架け橋として、兩者をよ  
 く理解しうる立場にあるのが、日本ではなからうか。ど  
 んなに西洋の學問や藝術を専心研究したとしても、いろ  
 いろな障害で、全體として西洋以上のものを産出するこ  
 とは困難であります。寧ろ東西の兩文化の綜合體を獨自  
 の立場で案出することが、われわれの途ではないかと思  
 われます。

同志社大學の木村教授が、日本人のやる英文學は當然  
 に比較文學論でなければならぬと言ふことを、アメリカ  
 に來て悟つたとこの程しみじみと語つていられました。  
 これは日本の先人、たとえば夏目漱石の如きが、すでに  
 やつており、また近くは一橋の吹田順助博士の文學論に  
 あらわれております。日本人にはより多くの負擔が當然  
 にかかつておるのであるが、この宿命的な重荷を背負い

きったときに、日本の新しい前途が拓けてくるのではないでしようか。

經濟の問題は特に大きい。アジアの心を知るとともに、アジア開發の仕事に、正しく挺身してゆくところに、日本人の新しい命運がかかっていると思ふ。この場合に、アメリカなり、ヨーロッパなりの技術や經濟をそのまま借用して行つても、妥當しない面があり、ここに日本人がアジア的に擴大する可能性は殘されておるわけがあります。

岡倉天心の新しい再現、より近代的な再現があつてもよいでしよう。少くとも、これからの日本人は、アジア的な自覺を心の底にしっかりと保持することが緊要であると確信されます。

## 第二 國際的識見

日本人の視點は、常に國際的水準の上に保たねばならない。國際的視野を持つと一口に言うが、言葉程にしか、事は簡單ではない。歐米を歩いてみて、如何に依然として日本が鎖國状態にあり、アジアの一角にとりこされてゐるかを、しみじみと悟るものであります。國際

連合のバスに乗りおくれるのも、また當然だと思われま  
す。アデナウワーが、七月のジュネーブ會議後の空氣を  
利用して、モスコに行つておるときに、日本は逆に八  
月に重光外相がワシントン詣でをしておるにすぎない。

御利益を期待するわけではないが、どうも考え方は反對  
のようであります。日本は言論が自由だというが、自分  
勝手な無責任な觀念論や思いつきが横行するだけで、世  
界大勢には毫も關係を持ってないようであります。日本  
は、もう二等國になつたのだから、正しく世界の勢力關  
係の推移を察知して、その間に自己の行きうる途を拓い  
てゆくより外はないのであります。一人よがり禁物  
で、絶えず世界的な基準で物を考えるようにせねばなら  
ないと思われます。

特に緊要なことは、經濟が國際的な競争場裡に立たね  
ばならないとともに、科學も文化も、またその高さにお  
いて、國際的水準に達するものでなければならぬこと  
です。模倣だけでよいというものではない。他國の進歩に  
追隨するだけでよいというものではない。自己の道路の目  
標を世界的水準におき、絶えずその高さを維持すること

に努力を傾注せよと言いたいのであります。これは、日本の學問と技術の自己反省を伴う問題であり、研究體制にも學者の心構えにも、痛切な批判を加えねばならぬ問題であります。

日本人にとっては、日本は一番良い所であり、洋行者は他の缺點には全く眼をつぶって、日本はしかし結構な國だと言って、ひたすら自己の内地の席の保持のみに逆に氣を配っておるのでは、正しい他山の石はいつになっても現われてこないようです。言葉は、その場の空氣を變え、暫時の氣休めにはなるわけだ。最後の審判が來てから、初めて眼ざめるのでは絶対に遅い。もう無條件降伏は二度はごめんでありませぬ。世界的視野で、絶えず物を見てゆく習慣を日本人が身につけなくては、形をかえた特攻精神のみが依然として跋扈するだけでありませぬ。

### 第三 組織の論理

終戦後の民主主義と自由主義とは、戦時體制に對する反動にて、よくも當時鸚鵡返えしに、マッカーサーの布告を禮讚し、それを今も後生大事に反覆しつづけておる

のは、全く笑止千萬と言わねばなりません。世界の歴史上で占領者が、マッカーサー程被占領民に歓迎された例は見當らない様であります。自稱インテリが占領政策を賞讃追従した醜態は、全くポンチ畫の記録そのものだったと稱しえましょう。どんな時にも、おちよこちよいの旗振りはおります。そして彼等もそれだけの歴史的價値はあったわけであります。問題は、自己の腹の内に、どれだけ主體的な判斷があったかと言うことであります。

日本の民主化は、連合國の占領政策の一環で、一面において有意義な社會改造を行ったわけですが、同時に日本の分解を企圖したことも無視できません。弱い日本、言わば日本の衰亡を期待する政策を秘かに抱藏していたわけであります。裸の個人主義や愚かな民主主義が、そこでいよいよ跋扈し、またこの傾向が盲目的に助長されてきたわけであります。

今度ヨーロッパに行ってみると、個人主義や自由主義は、封建的文化・キリスト教的倫理の中で培われ、ヨーロッパ協同體の中で適當に調節されておるうらやましい實相を眼のあたり見ることができました。個人主義や自



由主義は、豊かな人文主義や麗しい藝術主義と結びつき、渾然一體をなして居る觀が深いのであります。封建主義の中から個人主義が生まれたわけで、鬼子であっても、異質的な存在ではないという印象が強いです。社會があつての個人であり、倫理あつての自由だということとは、ヨーロッパでは自明のことのように思われます。

アメリカの方が寧ろかかる文化の遺産から解放され、放縱な生まの個人主義が、ころがっておるように思われます。二十世紀中葉のアメリカの民主主義體制を押しつけられて繼受した日本は、この意味では非常に不幸だったように思われます。ドイツ人は占領には服し、援助や救援は受取ったが、文化や制度の面では、頑としてアメリカ化を拒否した態度は實に見あげたものです。しかも、この米國でも良く見ると、社會に對する忠誠、法に對する服従が強調されておることが分ります。この一月四日にウースター市(人口二十萬)へ世界的に有名なミュージアムを見に出かけましたが、その地方裁判所のビルデングに、法に對する服従が自由である *Obedience to Law is Liberty* と大きく掲げてあつたのは、極めて

印象的なことでした。

この頃の日本の平和論も、平和主義は結構だが、少しも組織の倫理を考えていない缺點が顯著であります。「自分は死にたくない、だから戦争はいやだ」と正直に、本多顯彰の『指導者』は書いています。なぜ日本の社會の組織原理として、平和論が必要だという、政治外交的、經濟技術的な説明を與えてくれないのか、全く残念なことです。自分だけ生きてゆけば、自分だけよいめをすれば、それでよいという自己主義の倫理はこまつたものです。キリスト教は平和主義ですが、「己れの欲するが如くに人に施す」という隣人愛の社會觀を持っています。もっとわれわれは、どこで働くにしても、どこに行くにしても、組織の倫理を培わねばならぬと考えます。

私は今さらに、ここで、五人組制度や、家族制度や、義理人情や、親分子分の舊道徳を再現するように主張するものではありません。郷土愛を基盤に、近代的な組織の倫理は、かかる古いものを止揚しつつ、またその中から再製できるのではないかと考えていることだけを申し述べさせていただきます。

#### 第四 技術に對する確信

日本はいま、八千九百萬人の人口を持ち、その國民の生存のために悲劇的努力を餘儀なくされています。しかし、人は一つの胃袋を持つているとともに、二本の腕を持つておるわけで、この二本の腕が生存の技術を持つ限り、この過剰人口も逆に貴重な資源に轉じうるものではないでしょうか。日本が一流の教育普及國だという現實も、人口の生産力化に貢獻し得るのではないのでしょうか。

量産のアメリカに來て、労働の生産性の比較をまざまざと見せつけられたときに、日本の持つ技術に對する確信は、ややもすると消失してゆきそうでありました。またドイツの技術の精緻さ、労働者の勤勉さを目撃すると日本經濟の競争力に對して自信を喪失しがちのようでありました。

しかし、アダム・スミスではないが、やはりそこに實際分業は成りたつのではないのでしょうか。佛蘭西人が「考えてから走り」、英國人が「考えながら歩く」なら、アメリカ人は「ドライブして観るだけだ」の缺點が出て

おるようです。英國人が紳士で、佛蘭西人が藝術家で、ドイツ人が技術家なら、アメリカ人は工場労働者だという観は深いのです。日本人の特色は、ここで職人氣質に求められてくるようになります。良く言えば名人氣質、變な凝り性からくる労働意欲は日本人の特色のようです。禪的な表現を借りれば、これは三昧さんまいの境地であり、この精進の精神こそ、日本の技術の生きる途だと考えられてくるのであります。

日本人は、もつと科學的であり、研究の合理化をはかり、特に時の效果(タイム・エフェクト)を考え、そして社會の必要に即應する努力が大切であります。しかも、これらの必要條件に適應しつつ、日本の技術を生かして行くものは、日本人の左甚五郎的な職人氣質だと思われてならないのであります。われわれは何よりも、二本の手に技術をつけることを考えたいと思ひます。そして各人がその腕に自信を持つこととあります。

以上の四つを簡単に繰り返しますと、「アジアを忘れるな」、「世界を見よ」、「職分をつくせ」、「腕を磨け」との四言になります。さらに今まで私が言い古した言葉に

置きかえれば、「國際的經濟人の形成」に歸着するようです。

昨年の卒業生には、三つのAすなわち Accentuation (仕事は重點的にやれ)、Amusement (健全な娛樂を持つ)、Apprenticeship (小僧からたたきあげよ)の三語を餞けに差し上げたようです。徒らにキャプテン・オブ・インダストリー Captain of Industry の古い夢を抱き、反って現實に失望を感じ、不平を言ったり、小細工を弄することは、特にアプレntenテスの時代には禁物です。若いときに、若いときでなければできぬ技術の習得

を待望します。

固いことのみ申し上げますが、遠くに離れて居る私の老婆心として、非禮の點はお許し下さい。では元氣よく、社會に向って邁進して行って下さい。私もハーヴァードの下宿の一隅で、罐詰のビールをひらいて、同じテーブルにある氣持で、諸君の前途を祝福いたします。

朝の霜 夜のがらしに 耐えきたり

今日は若木の 梅咲かんとす

(一九五六年一月十五日)

(一橋大學教授)